

# 豆 狸 の 寝 言

副会長 三原幸二

小津安二郎の生誕百周年記念ということで、昨年十二月にBS放送で小津作品の数々が放映された。

その中で『東京物語』の終わりの部分を少し観ることが出来た。東山千恵子演じる母親が亡くなった後、実家に集まった子供たちが次々と帰っていくシーンだった。笠置衆、佐分利信、杉村春子らが画面に映っていた。原節子も私の記憶に残っている清楚な美人で、香川京子なども本当に清々しい清純そのものの姿で映っていた。話の筋よりも、それぞれの役者の持っている魅力に随分惹かれたものだった。

今、「昭和レトロ」といって昭和三十年代当時の生活環境や、その時代に使われていた生活用品、家電製品、おもちゃにいたるまで人気が集まって、全国十数ヶ所に博物館のようなものができ、そこを訪れる人は後を絶たないと聞いている。

なるほど、現代では『東京物語』のように実の子供達よりも亡くなった次男の嫁が義理の両親に尽くしてくれる、そんな出来事は想像すらできない。そんな、懐かしい人情、思い出を子供ごろに味わった人達が、昔の生活用品を見てなつかしく、なつかしく思い出しているのかもしれない。

また、いまだに人気のある『東京物語』が作られたのは戦後間もない昭和二十八年。敗戦によって壊滅的な打撃を受け廃墟と化



した日本で、あのような人情細やかな作品を小津監督が作り得たことに驚きを感じるのである。

バブルが崩壊して十五年も経つが、一向にその回復は見られない。先人たちに比べ、今を生きる我々がいかに力のない存在であるか。改めて先人の凄さを思い知り、我が身に“喝”を入れなければならないと思うこと、しきりである。

一度ゆっくりと『東京物語』を全編観てみたいと思っている。今の私なら充分理解することが出来るだろう。前回観たのは中学三年の時だったのだから。

(東京物語) 2004年執筆